

# 大阪府立看護大学大学院看護学研究科博士前期課程 における学位論文の研究方法に関する一考察

著者	高山 暁美, 中西 伸子, 山本 裕子, 中塘 二三生, 青山 ヒフミ
引用	大阪府立大学看護学部紀要. 2008, 14(1), p.57-61
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00005592">http://doi.org/10.24729/00005592</a>

資 料

大阪府立看護大学大学院看護学研究科博士前期課程における  
学位論文の研究方法に関する一考察

Investigation of graduate research and education by comparing master's theses  
and descriptive research papers submitted to the Graduate School of Nursing,  
Osaka Prefecture University

高山 暁美\*・中西 伸子\*\*・山本 裕子\*\*\*・中塘二三生・青山ヒフミ

Akemi TAKAYAMA, Nobuko NAKANISHI, Yuko YAMAMOTO, Fumio NAKADOMO, Hifumi AOYAMA

キーワード：看護研究，研究デザイン，修士論文，課題研究

要 旨

本研究は、これまでに提出された大阪府立看護大学大学院博士前期課程の学位論文の修士論文と課題研究を比較し、看護学研究の方法について検討することを目的とした。

対象は、2000～2007年に発表された学位論文132編である。本論文の研究方法は、先行研究（有森ら、2003）を参考にして、専攻領域、論文提出年、研究論文の分類、研究対象、対象者数、研究デザイン、研究分析方法、データ収集法に分類して、統計的解析を行った。

その結果、本研究では、次のことが明らかとなった。

1. 課題研究は、修士論文に比べて質的分析を使っている比率が有意に多いことが認められた。
2. データ収集法は、複数の方法を組み合わせて行なわれていることが認められた。
3. 課題研究では、修士論文に比べて、質的分析対象数が有意に少ないことが認められた。

以上の成果から、本研究は、大学院研究の研究方法のあり方を検討するための示唆を提供できよう。さらに、本研究は、修士課程にこれから入学する大学院生が研究の方向性を考えるための資料になると思われる。

I. はじめに

看護系大学院は、1964年東京大学に日本初の修士課程が発足した（新道，2003）。その後、看護系大学院は、緩やかに増加し、2006年には86校となった（日本看護系大学協議会事務局，2006）。

大学院教育の目的は、中央教育審議会2005年6月答申によると幅広く深い学識の涵養を図り、研究能力または高度の専門的な職業を担うための卓越した能力を培うと定められている。そのため大学院では、理論的思考を培いながら、看護現象の新しい知見を創造する看護学研究に力を注いでいる。

また、医療の高度・複雑化、人々の健康ニーズの多様化に対応するために、日本看護協会では、1996年より専門看護師（Certified Nurse Specialist：以下CNS）の認定を行っている（加藤ら，2003）。日本看護協会によると専門看護師教育課程認定校は、2002年8月では10大

学40課程だったが、2006年3月では22大学院73課程（新道ら，2003）と増加の一途をたどっている。CNSは、大学院教育において日本看護系大学協議会CNS教育課程基準で指定された内容科目単位を修得し、ある特定の専門分野において、卓越した看護実践能力を有することを認められ、日本看護協会CNS認定試験に合格する必要がある。CNSは、実践、コンサルテーション、コーディネーション、倫理調整、教育、研究の6つの役割を担っている。その中でもCNSの研究は、実践の場において専門知識・技術の向上や開発を行うことが求められている。

高瀬ら（1999）は、看護大学院生が大学院を選択した理由について1）広い視点に立って、専門分野を研究し同時に深い学識を身につける、2）教員になる目的やすでに教員である者の知識の増幅かCNSの資格習得への勉強がしたい、3）大学院で学ぶことによって看護の進展に何らかの形で貢献したいと述べている。また、澤井ら（2004）は、潜在的大学院生である看護職者の大学院進学理由について、専門性の充実、知識・経験・意義・自分自身の再構築、資格習得とキャリアアップであると報告している。

受付日：2007年10月5日 受理日：2007年12月13日

\*平成16年度大阪府立看護大学大学院看護学研究科修士生

\*\*兵庫大学健康科学部看護学科

\*\*\*岐阜保健短期大学看護学科

今後、看護系大学の増加とともに大学院に対する入学需要はますます増加するものと考えられる。しかし、先行研究では、特定の看護系大学院学位論文（修士）の傾向を分析した研究は少なく（有森ら，2003），看護系大学院に進学を望んでいる者にとっての情報は限られている。大阪府立看護大学では，1999年度に大学院博士前期課程が新設され，2007年度までの9年間に学位論文132編が蓄積されている。その中には，2001年度からCNS教育の一環として行っている課題研究61編が含まれている。2005年11月全国のCNS数は，139名と日本看護協会から報告されている。そのうち大阪府立看護大学大学院看護学研究科博士前期課程（以下：府看護大学院と略す）修了者は17名であり，全体の12.2%を占めている。

しかし，本学は，学位論文を修士論文と課題研究に分類して看護学の研究方法について検討したことはなかった。大学院入学者及び終了者のために，これまでどのような研究がなされていたかを情報として提供することは，それらの人が研究するために重要なことと思われる。本研究は，府看護大学院の学位論文を修士論文と課題研究に分類して看護学の研究方法について検討した。本研究は，大学院入学希望者に対して参考資料になると考えられる。

## II. 研究目的

本研究は，これまでの府看護大学院の修士論文と課題研究を比較し，看護学研究の方法について検討することを目的とした。

## III. 用語の定義

- ・ケア：患者の個別性を尊重した医療者のかかわり合い
- ・ケアの受け手：患者・患児
- ・ケアの提供者：看護者及び医療者
- ・修士論文：府看護大学院の学位論文に位置し，修士論文課程を専攻する者が行う看護研究論文
- ・課題研究：府看護大学院の学位論文に位置し，CNS教育課程を専攻する者が行う看護研究論文

## IV. 研究方法

### 1. 研究対象

2000～2007年に論文発表された132編

### 2. 収集方法

大阪府立大学はびきの図書センター所蔵の論文及び2007年修士論文・課題研究発表会の抄録から収集を行った。

### 3. データの分析方法

収集したデータは，比較検討のために有森ら（2003）の先行研究を参考に以下のように分類した。すなわち，①専攻領域，②提出年（論文が提出された年），③研究論文の分類，④研究対象（ケアの受け手，ケア提供者，ケアの受け手と提供者の両者，その他に分類），⑤最終分析対象者数，⑥研究デザイン（記述研究，相関研究，準実験研究，実験研究に分類），⑦研究分析方法（質的分析，量的分析，両方用いた研究に分類），⑧データ収集法（面接方法，観察方法，質問紙法，入手可能な（既存の）データ，生理学的測定法，その他に分類）である。

本研究では，上記①～⑧について，研究者3名で検討・論議しながら分類し，信頼性・妥当性を保持するように心掛けた。データの集計は，集計ソフト“Microsoft Excel 2000”（Microsoft社）を用いて行った。統計的解析には，統計解析ソフト“SPSS 12.0J for windows”を使用した。有意水準は，5%以下とした。

### 4. 倫理問題

本研究は，大阪府立大学が1)大阪府立大学はびきの図書センターに所蔵，2)修士論文・課題研究発表会において発表および抄録刊行，3)インターネット上にテーマ掲載している内容である。そのため，同データの活用については倫理的に問題がないと言える。さらに，個人が特定されないように配慮した。

## V. 結果

### 1. 論文発表数の領域別年次推移

修士開設当初からの学位論文発表数の領域別年次推移及び課題研究数は，表1に示すとおりであった。修士論文のうち課題研究数は（ ）で示した。

初回論文発表年にあたる2000年は13編，7つの専門領域（基礎看護学，慢性看護学，がん看護学，地域看護学，老年看護学，在宅看護学，母性看護学）であった。その後，専門領域では，2001年小児看護学，2002年急性看護学，2006年精神看護学，2007年感染看護学が新設された。2007年には，10の専門領域であり，論文発表数は26編であった。

また，課題研究は，2002年全論文15編中の5編（33.3%）であった。2007年の課題研究は，全論文26編中の17編（65.4%）を占めるようになった。

### 2. 修士論文と課題研究の比較

本研究では，修士論文71編（53.8%）と課題研究61編（46.2%）について，研究対象，研究デザイン，研究分析方法，データ収集法，質的分析対象者数の比較を行った。

#### 1) 研究対象の比較

表1 発表論文数の領域別年次推移

論文 発表年	N=132											合計
	基礎	慢性	がん	地域	老年	在宅	母性	小児	急性	精神	感染	
2000	5	1	3	1	1	1	1	-	-	-	-	13
2001	1	2	4	3	2	0	1	1	-	-	-	14
2002	2	1	2(2)	3(1)	2(1)	3	1	0	1(1)	-	-	15(5)
2003	0	3	2(2)	3(2)	0	2(1)	2	1	2(1)	-	-	15(6)
2004	3	1(1)	3(3)	2(2)	0	2(2)	2(1)	0	3(2)	-	-	16(11)
2005	2	3(2)	4(4)	2(2)	1	0	2(1)	0	0	-	-	14(9)
2006	3	3(3)	4(4)	1(1)	1	2(2)	2(1)	0	2(2)	1	-	19(13)
2007	3	2(1)	4(4)	3(1)	0	3(3)	1	2(2)	4(4)	2	2(2)	26(17)
合計	19	16(7)	26(19)	18(9)	7(1)	13(8)	12(3)	4(2)	12(10)	3	2(2)	132(61)

( ):「再掲」課題研究 - :未設置

表2 論文分類における研究対象の種類

研究対象の 論文分類	N=132				
	ケアの 受け手	ケアの 提供者	ケアの受け手 と提供者の 両方	その他	合計
修士論文	32(45.1%)	19(26.8%)	6(8.5%)	14(19.7%)	71(100.0%)
課題研究	39(63.9%)	13(21.3%)	3(4.9%)	6(9.8%)	61(100.0%)
合計	71(53.8%)	32(24.2%)	9(6.8%)	20(15.2%)	132(100.0%)

表3 論文分類における研究デザインの種類

研究デザイン の種類の 論文分類	N=132					p値
	記述研究	相関研究	準実験研究	不明	合計	
修士論文	43(60.6%)	17(23.9%)	10(14.1%)	1(1.4%)	71(100.0%)	ns
課題研究	50(82.0%)	9(14.8%)	2(3.3%)	0(0.0%)	61(100.0%)	
合計	93(70.5%)	26(19.7%)	12(9.1%)	1(0.8%)	132(100.0%)	

ns: not significant

表4 論文分類における研究分析方法の種類

研究分析方法 の種類 論文分類	N=132					p値
	質的分析	量的分析	質的・量的の 両方用いた分析	不明	合計	
修士論文	39(54.9%)	24(33.8%)	7(9.9%)	1(1.4%)	71(100.0%)	*
課題研究	49(80.3%)	7(11.5%)	5(8.2%)	0(0.0%)	61(100.0%)	
合計	88(66.7%)	31(23.5%)	12(9.1%)	1(0.8%)	132(100.0%)	

\*: p&lt;0.05

表2は、論文分類別に研究対象の比較を示した。“ケアの受け手”が両論文ともに最も高い比率であった。修士論文では、“ケアの受け手”32編(45.1%)、“ケアの提供者”19編(26.8%)、“ケアの受け手と提供者の両者”6編(8.5%)、“その他”14編(19.7%)であった。また、課題研究では、“ケアの受け手”39編(63.9%)、“ケアの提供者”13編(21.3%)、“ケアの受け手と提供者の両者”3編(4.9%)、“その他”6編(9.8%)であった。

“その他”の内訳は、修士論文では、“健康者”8編、“患者・児の家族”4編、“看護用語”1編、“施設”1編であった。課題研究では、“健康者”2編、“患者・児の家族”4編であった。

## 2) 研究デザインの比較

表3は、論文分類別に研究デザイン種類の比較を示した。研究デザインの種類では、“記述研究”がともにもっとも高い比率を示した。修士論文では、“記述研究”43編(60.6%)、“相関研究”17編(23.9%)、“準実験研究”10編(14.1%)であった。また、課題研究では、“記述研究”50編が全体の82.0%を占めていた。次に、“相関研究”9編(14.8%)、“準実験研究”2編(3.3%)であった。修士論文と課題研究における記述研究と相関研究の間で $\chi^2$ 検定を行った結果、両者間に有意差はみられなかった( $P>0.05$ )。

## 3) 研究分析方法の比較

表4は、論文分類別に研究分析方法の比較を示した。

表5 論文分類におけるデータ収集法の種類(複数回答)

データ収集法の種類 論文分類	N=132				
	面接法	観察法	質問紙法	入手可能なデータ	生理的測定法
修士論文	44(42.7%)	20(19.4%)	25(24.3%)	8(7.8%)	6(5.8%)
課題研究	51(51.0%)	13(13.0%)	11(11.0%)	24(24.0%)	1(1.0%)
合計	95(46.8%)	33(16.3%)	36(17.7%)	32(15.8%)	7(3.4%)

表6 論文分類における質的分析対象数の比較

論文分類	質的分析対象者数	対象数				p値
		平均値	標準偏差値	最小値	最大値	
修士論文	39	13.3	6.1	5	30	*
課題研究	49	9.5	4.1	4	19	

\*:p&lt;0.05

研究分析方法は、“質的分析”がともにもっとも高い比率を示した。修士論文では、“質的分析”が39編(54.9%)、次に“量的分析”24編(33.8%)、“両方用いた研究”7編(9.9%)であった。また、課題研究では、“質的分析”が49編(80.3%)、次に“量的分析”7編(11.5%)、“両方用いた研究”5編(8.2%)であった。

修士論文と課題研究における“質的分析”と“量的分析”の間で $\chi^2$ 検定を行った結果、課題研究での“質的分析”は、修士論文に比べ有意に高いことが認められた( $P<0.05$ )。

#### 4) データ収集法の比較

表5は、論文分類別にデータ収集法の比較を示した。データ収集法は、両論文ともに“面接法”が多い傾向を示した。また、データ収集法は、修士論文、課題研究とも“面接法”、“質問紙法”“観察法”などを組み合わせて用いていたことが認められた。

#### 5) 質的分析対象者数の比較

表6は、論文分類別に質的分析対象者数の比較を示した。質的分析対象者数は、修士論文では平均13.3名、課題研究では平均9.5名であった。本研究では、修士論文と課題研究における質的分析対象者数の平均値の間で、F検定を行い、等分散でなかったためWelchのt検定を行った。その結果、課題研究での質的分析対象者数は修士論文に比べ有意に少ないことが認められた( $P<0.05$ )。

## VI. 考察

### 1. 本研究と先行研究(有森ら, 2003)との比較

本研究と先行研究の比較においては、研究対象、研究デザイン、研究分析方法について、以下のように同じ傾向がみられた。1) 研究対象は、ケアの受け手(患者・患児)が半数以上を占めていた。2) 研究デザインは、記述研究が7割以上を占めていた。データ収集方法は、面接法が最も多く、次いで質問紙法、観察法であった。3) 研究分析方法は、質的分析が多く、次いで量的分析、

両方用いた研究であった。

一方、有森ら(2003)は、今後の課題として、研究の連続性と看護の直接的な効果を測定するような介入の実施が重要であることを述べている。さらに、研究テーマについて、有森ら(2003)は、看護大学大学院教育の特徴として、学生の関心を尊重する傾向があり、テーマが多様化するために記述研究が多くなると述べている。府看護大学院においても研究デザインでは、記述研究の割合が多く、先行研究と同様の結果が認められた。しかし、有森ら(2003)が述べているように学生の関心を尊重する傾向にあるかどうかについては、今後、さらに調査する必要があると考える。

### 2. 修士論文と課題研究について

研究対象は、修士論文32編(45.1%)および課題研究39編(63.9%)ともケアの受け手である患者を対象とした研究が、高い比率を示した。この一要因としては、府看護大学院の教育目標にもあるごとく、「専門性の高い看護実践能力や教育研究能力を備えた、看護実践のスペシャリスト、管理者、教育者を養成する」ことも関連しているように思われる。

一方、研究分析方法からみた場合、課題研究は、修士論文と比べて質的分析を用いている割合が高いことが認められた。また、質的分析対象者数は、課題研究の場合、修士論文と比べて明らかに少数であることが認められた。その要因として、課題研究は、修士論文と比べて単位数、時間が少ないことが影響しているように思われる。今後、例えば、質的分析対象者数を多くして研究するには、単位数、時間、研究の方向性など総合的に検討していく必要もあろう。

これらの課題に対して、有森ら(2003)は、CNSの教育の視点として多職種との協働の中で看護の介入を意識させる臨床家を育てるために、教員の研究プロジェクトの一部に学生を参加させるような研究指導體制の検討が参考になると述べており、この取り組みも必要であると

考える。

### 3. 博士前期課程研究論文の発展に向けて

羽山（2006）は、代表的な看護系大学院の場合、前期課程では修士論文とCNSの両コースを設置し、高度な実践者育成を目指し、後期課程では自立した研究者の育成を行っているとしている。

今回の研究では、研究デザインは記述研究が全研究の70.5%を占め、準実験研究は全体の9.1%、実験研究においては皆無であった。このことは、他大学院の傾向をみても同様であった（有森ら、2003）。新田ら（2004）は、日本の代表的な看護雑誌3誌の場合、実験研究は1割に満たず、さらに米国と英国の代表的な雑誌を比較した結果、日本では実験研究が少ないことを報告している。今後は、エビデンスに立証された研究が望まれ、大学院教育の中でも実験研究を研究デザインとした学位論文（修士）も必要であると考えられる。府看護大学院は、前期と後期課程を一貫したEBCP（Evidence-based Clinical Practice；科学的根拠に基づく臨床実践）ができるようにそれらを連結するリンケージ教育プログラムを行っている（羽山、2006）。その中に2006年から実験研究・準実験研究を取り入れおり、同プログラムは、今後のさらなる発展や成果が期待できる。

## VII. 研究成果

本研究は、一看護系大学院の研究の傾向を検討し、以下の結果が明らかになった。

1. 課題研究は、質的分析80.3%を示し、修士論文で

の質的分析54.9%と比べて、有意に高いことが認められた。

2. データ収集法は、複数の方法を組み合わせて行っていた。
3. 課題研究での質的分析対象者数は、平均9.5名を示し、修士論文での平均13.3名に比べて有意に少ないことが認められた。

以上の結果から、本研究は、大学院研究の教育のあり方に示唆を与えるものとして、重要であり、併せて今後の看護研究のための参考資料になるとと思われる。

## 文献

- 有森直子, 射場典子 (2003): 聖路加看護大学大学院における学位論文の特性 開設20年を振り返って, 聖路加看護大学紀要 (29), 59-72.
- 加藤令子, 小川理恵, 小山田恭子 (2003): 専門看護師認定に関する看護系大学院修士課程修士生への実態調査, 看護, 5月臨時増刊号, p150-160.
- 澤井信江, 野島良子, 田中小百合他 (2004): 潜在的大学院としての看護職者の看護学・保健学系大学院に対するニーズ Delphi technique を用いた全国調査, 日本看護研究学会雑誌, 27 (2), 29-37.
- 新道幸恵 (2003): 日本看護系大学協議会の組織と活動, 看護大学と大学院の動向, Quality Nursing, 9 (5), 373-377.
- 高瀬佳苗, 横尾初美, 坂本成美他 (1999): 看護大学院生の学習動機, Quality Nursing, 5 (12), 979-984.
- 新田紀枝, 和泉京子, 姉崎久敬他 (2004): 看護に関する実験研究の国内外の比較, 看護研究, 37 (1), 37-48.
- 日本看護系大学協議会事務局 (2006): 平成18年度 日本看護系大学協議会名簿.
- 羽山由美子 (2006): EBCP志向の博士前期課程・後期課程リンケージ, 学術月報, 59 (1), 59-62.